

「科学としての感情社会学」再考 — 「身体論」からの示唆を得て—

キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科 4 年
澤 田 唯 人

《論文要旨》

これまで人間にとって最も自然に近い現象とされてきた「感情」について、そこには社会的な管理や規則が働いているとし、社会学的対象に据えたのが「感情社会学」である。しかし、感情社会学は生理学や心理学に基づく普遍主義的な感情理論とは一定の対峙をしたものの、文化や社会構造、言語的構成との関連でのみ相対化したため、個々人の「生きられた感情経験」を捉えることができなかった。つまり、「生きられた感情経験」の全体性が切り詰められ、唯一性が蔑ろにされたといえる。それゆえに、感情社会学の営みが、感情管理を促す道具や言説となる危険性が指摘され、また「感情」を科学的に分析することそのものの暴力性が、感情社会学者たち自身によっても度々批判されてきた。しかし、いまだ「生きられた感情経験」の社会学的説明は導きだされてはいない。



本論文では、以上のような困難の理由が感情社会学の「科学性」にあることに注目し、その問題点を論じている。そのうえで「生きられた感情経験」を社会学的に説明するための方向性を示そうと試みた。まず感情社会学の学説史的展開を精査するなかで摘出された問題点から、「科学としての感情社会学」が「身体」を物体としてのみ捉えているか、またはそれを排除していることが明らかとなった。さらに、この点を「身体論」から検討するなかで、科学としての感情社会学に共通する問題として、「感情語」に指し示される感情のみを対象としてきたことが見出された。そして感情の言語的表現には身体経験になぞえられたものが多くあることに着目し、そのような表現が生成される過程に立ち会うことで、感情社会学が「生きられた感情経験」を説明できるのではないかということを示唆した。

目 次

はじめに

1. 成立期における学説と限界
 - (1) 感情社会学前史
 - (2) 実証主義派と相互行為論派
2. 社会構築主義からの展開と限界
 - (1) J・クルターの「認知主義」批判
 - (2) 構築主義的アプローチと困難
 - (3) 「生きられた感情経験」という問題
3. 身体論からの再構成
 - (1) 感情社会学と〈身体〉
 - (2) 「生きられた身体」の回復
 - (3) 両義性・可延性・可逆性・共感覚性
 - (4) 「隠喩性」と感情社会学
4. 生きられた感情の社会学へ
 - (1) 「なぞらえ」による経験と理解
 - (2) 身体感覚とメタファー
 - (3) 社会的身体と〈受肉〉された社会
 - (4) 身体経験の比喩化

おわりに

<注釈>

<参考文献>

はじめに

感情社会学 (Sociology of emotion) は、日常的には「自然的枠組」(Goffman 1974) によって理解される「感情」について、その社会的構成や文化的相対性を問う営みである。そこには「1960年代の時代精神」(Kemper 1990:4) ——合理性への懐疑、表現の重視、自己への注目——が反映して、他者と同じ感情を抱けずに悩む者を解放する契機が見出され、また科学的合理性や客観性に偏重した社会学にパラダイム転換をもたらす期待が寄せられた。

しかし、その後の感情社会学の展開は、いささかアイロニカルである。感情社会学が個々人の「生きられた経験 (Lived Experience)」を扱っていないとする批判 (岡原 1998)、「生きられた感情」を科学的分析モデルや言語的構成に切り詰めようとするがゆえに、「感情社会学という暴力」(崎山 2007) が成立するとの批判が、当初から存在していた。そうした難点を逃れるべく、「感情的社会学 (emotional Sociology)」(Ellis 1991) や「感情公共性」(岡原 1998) の提唱もなされたが、問われるべきは、感情社会学の科学的性格そのもののはずである。

すべての感情経験は、例外なく「生きられた感情経験」である。ならば、まずはそれに社会学的説明を与えることが、感情社会学の第一義的課題となる。本稿は、感情社会学の学説史を追いながら、これまでの「科学としての感情社会学」が、感情経験のもつ全体性や唯一性を説明しきれなかった経緯を精査し、その問題点を摘出する (1. 2.)。そして、その科学的困難を総括したうえで、照準すべき「生きられた経験」の位相を、メルロ=ポンティの『知覚の現象学』(Merleau-Ponty 1945=1967) から検討する (3.)。最後に、捉え直された「経験」の位相において、どのように「感情経験」が説明されるかを検討しつつ、「生きられた感情の社会学」の成立可能性を提案してみたい (4.)。

1. 成立期における学説と限界

(1) 感情社会学前史

従来、「感情」とは生得的かつ個々人の内から湧き起る自然現象と考えられてきた。そして感情研究も、「感情」を生理的・精神的「実体」とみなす生理学や心理学によって主に担われた。そうした研究の問題点を、感情社会学の展開に影響を及ぼした点に限って、確認しておこう。

生理学では、観察可能な脳機能やホルモン分泌などの「生理的变化」に感情の客観的・決定的要因をもとめる。そして「各情動は諸要素の総和であって、各要素はすでによく分かっている種類の生理的過程が原因」で生じるのだという (James 1892=1993[下], 212 頁)。

感情表出も「生理的变化」からの派生的現象と捉えるため、「悲しいから泣く」のではなく、「泣くから悲しい」という捉え方になる (ジェームズ・ラング説)。この見解では4つの点で感情経験を説明しきれない (図1参照)。

図1 「生理学の図式」



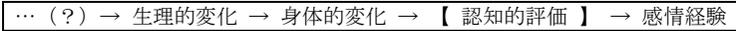
- (a) なぜ「生理的变化」が起こるのか
- (b) 身体(生理)的变化と感情経験の連関。
- (c) 感情の弁別, 身体感覚との異同の決定性。
- (d) 科学的因果系列を敷くことでの無限遡行。

日常場面に照らせば、相互行為の文脈と無関係に、突然「生理的变化」が置き、突如として「感情」を経験することはない (a)。また身体的変化 (例えば赤面) を知覚しても、無条件に特定の感情 (恥) として経験するとは限らず (b)、別の感情 (怒り) や感覚 (痛み) として経験することもありうる (c)。そして因果的説明では仮に不備 (a) が解消されても、さらにその原因の原因 (…) を無限に問うることになる (岡原 1987, 329 頁を参照) (d)。

心理学の研究には、シャクターらの実験 (Schachter & Singer 1962) がある。この実験は「ビタミン剤の効果を測定する」との名目で、被験者に生理的興奮を引き起こすエピネフリンが投与される。ある被験者には、ビタミン剤の副作用 (実際はエピネフリンの作用) の正しい情報 (動悸など) が与えられるが、他の被験者には与えられない。また実験には、ある情緒反応 (多幸または怒り) を示すサクラが参加した。結果、正しい情報を得ていた被験者は、サクラに影響されずに、引き起こされた動悸などを薬品によるものと解釈したが、そうでない被験者はサクラの演技を手掛かりにサクラと同じ感情を報告する傾向にあった。

この結果から、感情経験には「生理的变化」と「認知的評価 (ラベル付け)」の2つが必要だとする「感情の二要因論 (ラベリング論)」が提起された。これは身体的変化 (感覚) と感情経験を媒介し、弁別するものとして「認知的評価」を据えたため、上記の難点 (b)・(c) を克服するものであった。だが、実験での生理的变化は人工的なものであり、科学的因果モデルはそのまま継承しているという点で (a)・(d) は残る (図2参照)。

図2 「心理学（二要因論）の図式」

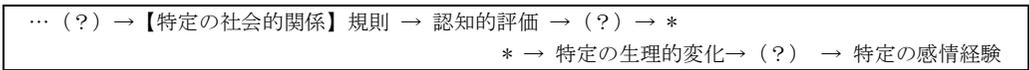


しかし、この「二要因論」は「認知的評価にもとづき意味解釈に注目するという『社会学的』な視座」(崎山 2005, 16 頁)を用いたため、感情社会学はこの「認知的評価」という切り口から理論展開をすることになる。生理学や心理学の「科学的」図式を——本来、ディシプリンや守備範囲が異なるはずなのだが——無批判に受容したことで、感情社会学は以下にみていくような困難を抱え込むことになった。

(2) 実証主義派と相互行為論派

ケンパー (Kemper 1978a,b) は、感情社会学説として、「認知的評価」を因果系列の前半に、「生理的变化」を後半に置いた。そして特定の「社会的関係」¹⁾を認知することで、特定の生理的变化が引き起こされると説明した。さらに、人が怒りの感情を経験しているときにはノンエピネフリンが、恐怖や不安を感じているときはエピネフリンが分泌されることを明らかにしたフンケンシュタイン (Funkenstein 1955) の知見に依拠し、特定の生理的变化が特定の感情を起こすとした。彼は「社会生理学 (Sociophysiology)」を唱え、「感情を喚起する社会関係の規則的様態と、特定の感情を形成する生理的变化の種類との対応づけ」が可能だとし、自らの理論の「実証主義」を強調する (Kemper 1978b:30)。だが、因果系列の後半部に「生理学的説明」を利用しているため、難点 (b)・(c)・(d) が該当する。また「社会的刺激があれば、自動的に感情が経験される」(Kemper 1981:351) とするため、以下の点を説明できない (図3参照)。

図3 「実証主義派の図式」

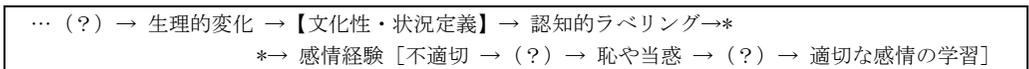


- (e) 感情経験は文化・歴史的に特有で、さまざまである。
- (f) 同じ状況にいても個々人の感情経験は異なる。
- (g) なぜ「認知的評価」が「生理(身体)的变化」を起こすのか。

感情語の種類や感情経験は文化・時代で相対的であり²⁾、「社会的関係」の規則性および普遍的実在を与件とすることはできない (e)。また、同じ状況 (例えばホラー映画をみる) でも感情経験に個人差 (怖い・怖くない) があることを説明できない (f)。そして、認知という心的営みが、身体的営みに変換される仕組みが明らかでない (心身問題) (g)。

一方、相互行為論派に分類されるショット (Shott 1979) は、ケンパーとは反対に、同じような生理的变化が生じて、「認知的意味づけ」によって経験される感情が異なることに注目した。その意味づけ作業には、「文化性」や「状況定義」が影響しているとし、感情経験の文化的差を「感情の語彙 (ラベル)」の文化的差、個人差を個々人の「状況定義」の差と考えた。そのため難点 (e)・(f)・(g) が克服されるが、一方で (a)・(d) は残る (図4参照)。

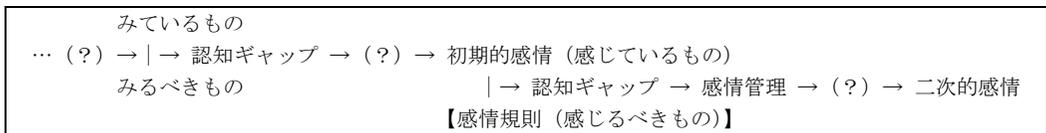
図4 「相互行為論派 (ショット) の図式」



また、ショットの説明では、同一文化内においては個々人の状況定義によって如何様にもラベリングが可能になりうるという問題がある。これに対し、適切なラベルでない場合は「恥」などの感情がサンクションになるとするが、それらの感情の生起については説明されない。

ホックシールド (Hochschild 1983=2000) は、(初期的)感情経験の発生について「みているもの (What I see)」と「みることを予期しているもの (What I expect to see)」の認知的ギャップにあるとするのみで、具体的に論じなかった (同上, 250 頁)。しかし、発生した感情は、相互行為場面に潜む「感情規則」と比較され、適切な感情経験でないときは「感情管理」が要請されるとした。また、それが職務上必要なものを「感情労働」とし、本当の感情 (自己) から疎外されると論じた。この説明に社会学的意义があることは間違いないが、問題もある。それは説明図式に起因しているため、先にそれを確認したい (図5参照)。

図5 「相互行為論派 (ホックシールド) の図式」³⁾



まず因果モデルであり、認知過程が前半部にあるものの (初期的)感情経験が起きる機制が不明なため、難点 (d)・(g) が該当する。また表出的側面での管理 (例えば葬式で悲しいふりをする) ならば、演技である点で当事者はそれを虚偽とするが、深層演技による感情管理 (悲しくなかったが、故人との思い出を思いだしてみたら、悲しくなった) は、それこそが本当の感情だ (本当は悲しかったのだ) とする場合もある。つまり絶えず展開される相互行為のなかで、当事者は自身の感情経験を「初期的」であるか、それとも「二次的」であるかを容易には区別できないだろう (Kemper 1981:336)。そのため「感情労働 (管理)」を疎外論として取り上げるホックシールドの説明自体が、感情を疎外する危険性がある⁴⁾。

初期の感情社会学では、図式の違いから実証主義派と相互行為論派で論争になった。詳述する余裕はないが、結局、実証主義派が生理的变化による決定性が強い「基本感情」を、相互行為論派が基本感情をもとに社会的に構成される「派生感情」を扱うとされた。つまり両者にはそもそも「真の対立はない」(Scheff 1983:341) とされたのである。だが、「こうした妥協こそ」が、本来なされるべき「生理学的・心理学的な観点との対峙を放棄」させたといえる (崎山 2005, 44 頁)。

2. 社会構築主義からの展開と限界

(1) J・クルターの「認知主義」批判

成立期の理論は「認知的評価」に感情の社会性をもとめる点、また因果モデルで段階的説明をとる点で共通する。これらを Pylyshyn (Pylyshyn 1980:131) に習い、「認知過程介在 (cognitive penetrability)」問題と批判したのが社会構築主義者のクルター (Coulter 1979=1998, 1989) である。彼は、説明図式に「認知的評価を組み込めば」、それが社会的諸力や規則の影響をうけるにしても、「心の内面を感情が位置する場所として心理学主義・認知主義的理論構成に属してしまう」(Coulter 1989:40) と述べ

る。

- (h) 段階的認知過程を経ず、人は端的に、ひといきで感情を経験する。
- (i) 一般化・定式化された規則は認知を介して感情経験そのものを決定するわけではない。

様々な事柄がやりとりされる相互行為で、感覚や感情経験のみが意識的に特化され、認知のモニタリング対象となるのは、稀である (h)。人は「私は〇〇を感じている」と認知的内省過程を通じて内言化や外言化することができるが、わざわざそのようにするのは、ある状況にとって「不明確、不適當、理解不能なことが生じたときだけ」であり、常に感情の認知的言語化が要請されるわけではない (Coulter 1989:37)。また感情をめぐる規則は、ある感情経験に「先立って、いかなる感情を経験するかを自動的に決定することはない」。これは「誰が何を述べるのか」を「文法規則が決定づけないのと同じである」。そのため規則を、感情経験の『原因となる』ように『心』に留められ「解釈的コードブックとしては理解できない」(Coulter 1989:45) (i)。以上がクルターによる主な批判である。

(2) 構築主義的アプローチと困難

クルターは、自らが指摘した成立期理論の難点を克服しようとする。

まず (h) について、感情経験は「自然言語を習得しているかどうか、したがって文化的な知識および理由付けの慣習を会得しているかどうか、懸かっている」(Coulter 1979=1998, 201 頁) とし、「適切な概念」と「論理文法」の所有を、感情経験の前提とする。

次に (i) について、「規則が決定するのは因果的に導き出される行動上の結果ではなく、むしろ経験されることの理解可能性・適切性である」(Coulter 1989:45) とし、規則は個人の特定の行動そのものを決定・拘束するのではなく、当の相互行為場面で何が理解可能な行動として参与者に扱われるかの説明論理そのものであると述べる。

そして「構築主義的な感情社会学のより実り多い企ては、実際の様々な感情の述語の使用 (use of affect predicates) の構成的論理を研究することである」(Coulter 1989:47) とし、ある感情経験がどのようなカテゴリーと論理的に結びつきながら、理解可能なものとして構築されるのか、その様態を詳細に検討するという。そのため彼は後期ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジー (以下「EM 研究」と略記) を採用する。

感情の言語的構成・論理文法分析は、感情の局所的な構築——ある個人の感情経験が参与者たちにとって (理解可能な) 現実として構築される過程と方法 (ethno method) ——を対象とし、記述する。しかし、それが感情経験を扱えるかには理論的境界もある。

- (j) 「自然言語の習得」は、身体的変化を含めた感情経験を可能にはしない。
- (k) 「感覚」と「感情」を存在論的に分離することはできない。
- (l) 個人にとって具現化する感情経験を扱えない。

まず (h) に対するクルターの回答である「自然言語の習得」は、人々が感情経験を理解することは可能にするが、感情をまさに経験することを可能にするものではない。「頭では理解できるが、そのように感じない (思わない)」ことがありうるからだ (j)。また彼は「怒りを感じる」などの言い方から「情緒が感覚であるかのような誤解が生じるが、「感覚が当の情緒であるわけではない」(Coulter

1979=1998, 188-190 頁) と述べ、ふたつを明確に区別する。そして感情に対しては相互行為場面で異議申し立て(「そんなことで怒るの?」)が行われるが、身体感覚の場合はそのようなことがないことに両者の存在論的差異をみる(Coulter 1979=1998, 194 頁)。だが、例えば「仮病」を疑ったり(身体症状)、「なんでトマト食べれないの?」(味覚)や(親が転んだ子に)「そのくらい痛くない」(触覚)など、身体感覚をめぐる様々な異議申し立ては多々ある。また逆に「抑えられない怒りを感じていたから」など、感情経験を理由に自己の行為を正当化し、異議申し立てを斥けることもある。ゆえに、身体感覚と感情は容易に分割すべきではないし、感情経験が全く言語的に構成されるとも考えられない(k)。

さらに方法論的限界として、「社会問題の社会学」で、問題の「構築性」と「実在性」をめぐる指摘された「オントロジカル・ゲリマンダリング問題」(Woolgar & Pawluch 1985)が該当する。例えばある参加者が偽りの感情経験を報告した場合でも、それが相互行為場面で理解可能ならば——実際には、そのような感情は存在しなくても——それは現実として構築される。これは「EM 研究」が、報告された経験の実在性を所与としているためである。また「EM 研究」は相互行為における「目の前の他者」のみを想定し、そこでの(外言をめぐる)現実構築を対象とするが、「内なる他者」を想定した個人にとっての現実化過程は扱えない。むしろ感情経験とは個人にとっての現実化・具現化の経験であると考えられる。そのため「EM 研究」は——もちろん社会学的にひとつの有効な方法ではあるが——殊に「感情経験」に社会学的説明を与える場合には、その射程に限界があるといえる(1)⁵⁾。

(3) 「生きられた感情経験」という問題

ここでは、これまで摘出してきた難点の淵源たる感情社会学の「科学性」そのものを問題とする。エリス(Ellis & Flaherty 1992:2-4)の主な感情社会学批判は以下のようなものである。

- (m) 生きられた感情経験を「科学的客体としての感情」と「経験する主体」とに断絶した。
- (n) 生きられた感情経験から「身体性」を排除した。
- (o) 生きられた感情経験に沈殿する「集合的記憶」や「時代的特性・変化」を無視した。
- (p) 生きられた感情経験を「誰にも生きられていない、誰のものでもない感情経験」にしたのは科学的理性を信奉する研究者とその共同体文化である。

エリスは、「生きられた感情経験」を捉えるために、研究者自身の感情経験も対象に、感情を感情的に考察し、その位置づけを社会史的・主観的に分析するという。そして「自己内対話が語りとして、他者との対話へ発展する」とし、「相互行為的内省」を組み込んだ「感情的社会学(emotional Sociology)」(Ellis 1991)を提唱する。これについて岡原は「(研究者が:筆者)自らの主観性を方法に取り込もうとしても、それは研究という行為の範囲を拡張するのであって、研究という制度それ自体を放棄しようとするもの」(岡原 1998, 41 頁)ではなく、感情経験の「科学的」研究・調査に必然的に伴う調査者-被調査者の権力的・暴力的関係に無自覚であると批判する⁶⁾。彼は学術的営為という位置から離れて、個々人の私的感情や主観性を公にひらき、「真理性や正当性といった妥当要求よりも」、自分の経験に裏打ちされた「真実性の妥当要求が鋭く主題化」される相互行為の場——「感情公共性」(岡原 1998, 185 頁)を提唱する。だが、一つの実践としては興味深い、感情経験の社会学的説明はいまのところ導きだされそうにない。

崎山(崎山 2007)はこれらの方法は既存理論では捉えられなかった「感情経験の多声性があからさ

ま」になると一定の評価を与えるも、「言語化されえない感情経験、われわれがアモルファスに感受」する経験を「描写・記述という水準においてそぎ落してしまう」ことを指摘する。そこで崎山は「原型的に生きられた感情経験『そのもの』は決して扱えないと宣言する方が正しい」と述べる (q)。

(q) 「生きられた感情経験」は言語化できない全体性と唯一性をもつ。

この感情経験の「言語化不可能性」という視点は、デンジン (Denzin 1984:126-127) の「感情語は生きられた感情経験そのものを表わす語ではなく、それが一般化・観念化されたものでしかない」や、高橋 (高橋 1996, 70 頁) の「(感情語は:筆者) 感情の本質としての流れ、動きを捉え損なっている。当事者からすると、これらの言葉は自分の経験に比し、あまりに一般的、抽象的な感じがする」という発言と通じている。

最後に、「生きられた感情経験」に社会学的説明を与えるための課題を整理すれば以下のようになる (図 6 参照)。

図 6 「感情経験の社会学的説明課題」

(A) 「身体感覚」と「感情経験」を包括的・一体的に説明すること。	【(a)・(b)・(g)・(j)・(k)・(n)】
(B) 認知過程を介さずに、身体・感情経験の社会性を明かにすること。	【(c)・(e)・(i)・(o)】
(C) 相対化の単位を文化や時代または個別場面だけでなく個々人にも置くこと。	【(f)・(l)】
(D) 因果的・段階的説明モデルをとらないこと。	【(d)・(h)】
(E) 感情経験の〈世界〉を、科学的秩序を前提にしたモデルに押しこめないこと。	【(m)・(p)】
(F) 感情経験の言語化不可能性について説明すること。	【(q)】

3. 身体論からの再構成

(1) 感情社会学と〈身体〉

従来、「身体」とは自然的・物質的存在であり、遺伝的 (生理的) 要因や社会環境的要因が作用する科学的・客観的「実体」とされてきた。そして感情社会学もまた——科学的営為であるがゆえに——この「物的身体」観を採用している。

成立期理論が「生理学的決定論」と「社会・文化決定論」の「合いの子」であったのは、経験の現場となる〈身体〉を「物的身体」としてのみ捉えていたからである。科学的対象である「物的身体」を所与とすれば、そこに起こり、そこで経験される感情もまた科学的客体と化す。そして感情は「物的身体」の性能 (認知) を通して与えられる「客観的世界」の生理的要因や社会規則の側に還元される。これを避けようと「物的身体」もろとも〈身体〉を斥け、感情と切断したのが構築主義的アプローチであった。だが、「経験の現場」たる〈身体〉の脱落に伴い、経験そのものも脱落する。そのため研究対象は感情の理解をめぐる言語能力と実践に一元化された。それはテキスト (自然言語・論理文法) 的理解がなければ経験もないという「言語決定論」的説明であり、感情は言語的理解を担う知性や思惟能力の側に還元される。しかし、感情経験はテキストに回収されえない「言語化不可能」な層をもつことから、切り詰めが生じる。

これらの科学的感情社会学を「生きられた感情経験」に暴力的だと批判した「感情的社会学」や「感

情公共性」は、「反科学」として「主観性」の回復を強調したが、〈身体〉については具体的に論じなかった（図7参照）。

図 7

	〈身体〉観	科学 - 反科学	主義	問題点
成定期理論	「物的身体」観を採用	科学	客観主義	・生理－社会的決定論 ・認知主義 ・「生きられた感情」問題
構築主義理論	感情から〈身体〉を切断	科学	主知主義	・言語決定論 ・感情の切り詰め ・「生きられた感情」問題
感情的社会学	科学による身体性の排除を指摘したものの、具体的には不明。	反科学 (だが科学性を残す)	主観主義 非合理主義	・科学性を残している ・そのため科学理論と同様
感情公共性		反科学		・科学的説明能力を失う

つまり「科学があつかう身体は具体的な生のなか」の〈身体〉から「さまざまの〈意味〉を捨象すること」（市川 1992, 85 頁）で成り立つため、誰にも生きられていない「物的身体」を前提にする限り、そこには誰にも生きられていない規格化された感情が出現する。このように感情社会学の困難は、感情経験の現場・前提となる〈身体〉の次元で既に始まっていたと総括できる。ゆえに、感情社会学の再生は、〈身体〉の回復に始められるべきである。

(2) 「生きられた身体」の回復

「感覚」をめぐる同様の問題を検討したのがメルロ＝ポンティである。彼は「科学の全領域は、生きられた世界のうえに構成され」ていて、科学的説明は「世界経験の二次的表現」でしかなく、「生きられた経験」と「同一の存在意義」をもたないと批判した（Merleau-Ponty 1945=1967[1], 3-4 頁）。そして科学的説明の対象となる客観的世界ではなく、「その手前にある生きられた世界（Lebenswelt）」（同上[1], 10 頁）に還帰する。但し、それは従来の現象学がとる先験的意識への観念論的還帰ではなく、事物が有体的に現前する経験の原現象に迫るものである。ゆえに彼の客観主義・科学主義への反対は、決して反科学＝観念論的哲学・主観主義・非合理主義への同調ではない（Merleau-Ponty 1964=1989 を参照）。つまり主体の経験を説明する際に、客体の側へ超越したところに見出される「客観的世界」の構成関係として分析する経験科学を斥けながら、他方で同じその経験を、主体の側へ超越したところに見出される言語・思考能力から分析する主知主義をも斥けるのである。

そしてメルロ＝ポンティは、客観的世界と観念論的意識のいずれにも還元されない次元として〈身体〉を見出す（Merleau-Ponty 1945=1967[1], 162 頁）。〈身体〉は確かに物体であるが、同時にそれは体感・体験・体得する〈私〉である。〈私〉が移動すれば常に〈身体〉が移動し、〈身体〉が移動すれば〈私〉に現れる世界は変転する。何かが消え、何かが現れ、大きさや遠近、位置関係が変わる。ものを取るとき、手や腕をあれこれ意識せずに、手や腕そのものを生きて活動する（同上[1], 125-133 頁）。暗闇で何かを探してもうまくいかないが、鼻は全く探すことなくひといきでつまめる。〈私〉は〈身体〉の空間・姿勢・配置・図式を考へることなく、直接そのものとして知れるのである（同上[1], 172-179 頁）。〈身体〉とは「受肉した実存」であり、「私とは私の身体である」（同上[1], 325 頁）。

科学は特定の視点からのパースペクティブ的な世界の現れを排除することで「客観的世界」を成立させる。ならばこれに対し、〈私〉の世界への特定の視点である〈身体〉を回復することが「生きられた世界」へと立ち戻ることを可能にするのである。

(3) 両義性・可延性・可逆性・共感覺性

メルロ=ポンティは〈身体〉を「幻影肢」現象から検討した(同上[1], 138-159頁)。それは四肢の切断手術を受けた患者が、物体としては存在しない四肢の末端に、それが現存するかのように「痛み」や「痒み」を経験する現象である。それは〈身体〉が外皮(切断面)に境界を持たないことを示す。切断直後には生々しくある幻影肢は、患者が欠損と折り合いをつけると消えていくため、生理学の客観的説明は成り立たず、また「欠損の拒否」という心理学的説明も、切断部から脳に向かう求心性神経路を裁断すれば幻影肢は消失するため成り立たない(同上[1], 138-140頁)。つまり「生きられた世界」の経験は、科学的には説明不可能なのである。それは人が〈世界〉にかかわろうと挺する〈身〉が、物的でも心的でもなく、意識に浸透された事物——「生きられた身体」だからである。つまり「幻影肢をもつとは」、その肢体だけに「可能な一切の諸行動に今までどおり開かれ」ようとし、意識としては未だ〈世界〉に巻き込まれたままの肢体が剥き出されることで起こる。それは〈身体〉が〈世界〉と密着し、浸蝕しあう「世界内存在の媒質」だからである(同上[1], 147頁)。〈身体〉の(物体と意識の)「両義性」に加えて、その基本的特徴を3つ確認したい(次頁参照)。

——「可延性」

〈身体〉は外皮を超えて、さまざまに空間化し、延び広がる。例えば杖を使い始めるとき、掌で杖の感触を得る。だが慣れてくれば杖の先まで感覚が伸び、杖の先で地面を感じる。つまり「触覚の広さと行動半径を増した」のである(同上[1], 240-241頁)。キーボードのブラインドタッチを〈身〉につけるとき、始めは手や指の持ち運びが意識されるが、次第に意識せずに、正確なタイピングが可能となる。目を閉じても手足の位置がわかるように、キーの位置を知り、ひといきで押せる(同上[1], 241頁)。駅から自宅まで帰る際、道順や建物を意識せずに帰れるのは、手を肩から膝まで何の比較考量もせずに持ち運べるのと同じように、〈身〉につけ、それを生きるからである。

——「可逆性」

感覚とは「感覚されるものが感覚する者のなかへ侵入」することではない(同上[2], 19頁)。例えば樹木の表面を触るとき、皮膚は木肌の起伏を覆い、同時に木肌が皮膚を押し窪める。空に視線を送るとは、空が〈私〉に表現してくることである。感覚する主体と客体は「一方が作用して他方が受け取る」か、一方が他方に感覚を与える」関係ではない(同上[2], 19頁)。感覚とは〈身体〉と〈世界〉が密着し、躍動し、表現しあうこと——「始原的接触」である(同上[2], 29頁)。つまり〈身体〉の「世界内存在」は、「心臓が生体のなかにある在り方と同様」であり、常に主客が「可逆的」なのである(同上[2], 3頁)。これは「科学」からすれば比喩に過ぎない。だが、実際は逆であり、科学的言説が「生きられた経験」を覆い、「始原的接触」を忘れさせるのである。

——「共感覺性」

「諸感覚は互いに交流しあう」(同上[2], 35頁)。例えば「枝の動きのなかに」「しなやかさや弾性

が」見える（同上[2], 40 頁）。車の騒音から「舗石の堅さや凹凸が聞こえる」（同上[2], 40 頁）。「聴覚の支えを欠くと、映画の画像」は「ストロボスコープ運動を誘発しないが、ある聴覚リズムが」加われば「動きの知覚を惹き起す」（同上[2], 38 頁）。〈世界〉が表情をもつのは、「全感覚機能」が「世界内存在という一般的運動のなかで」「互いに結びつけられている一つの共働系だからである」（同上[2], 46 頁）。これも比喩ではない。むしろ成り立たないのは、其々の刺激に対し、一つの感覚だけを割り当てる科学的知——「恒常性仮説」である（同上[2], 38-29 頁）。「音をみたり色を聴いたりする」ことは、「例外的な現象でさえない」。人が「それと気がつかないのは科学的知識が具体的経験を」覆い隠すからである（同上[2], 39-40 頁）。

(4) 「隠喩性」と感情社会学

〈身体〉の感覚経験は「前客観的世界」での「始原的接触」である。そのため科学的説明や日常的散文では「生きられた経験」は言語化できない。メルロ=ポンティもそのことを強く意識し、「まだ黙して語らない経験」と表した。そしてそこへの帰還の営みを、詩人や芸術家と同じ「不断の辛苦」だと述べる（同上[1], 35 頁）。つまり言説によって定立された客観的世界——「生きられた経験」と「経験主体」を隔てるテキスト——の帳を引き裂き、〈世界〉との肉迫した接触経験を回復し、再びそれを表現へともたすことは、詩人と同じ営みだという。なぜなら〈世界〉はそもそも詩的・隠喩的に経験されるからである。詩や芸術、自然が、ときに〈私〉を言語化しえない「溶解体験」へと至らすのはこのためであり、また逆にいえば、科学的叙述、日常的な常套句は既に「生きられた経験」を表現するには「失効」している。メルロ=ポンティは科学的・因果的な経験説明は生き生きとした動きを欠き、二次的なものでしかないと繰り返し批判するのである。

ここまで「生きられた身体」と「生きられた経験」の位相を確認したが、メルロ=ポンティの議論は主に「感覚」についてであり、「感情」にはそのまま適用できない。しかし、この「生きられた経験」の隠喩性に着目するとき、見落としていた問題が明らかになる。それは「科学」が隠喩的表現——それ以外では接近できない「生きられた世界」——を嫌い、排除するという点である。それは「科学」の論理性と客観性を揺るがすためであるが、ここで強調したいのは、感情社会学が「科学」であるために「感情語」が指し示す客観的で明快な感情——「楽しい」「悲しい」「怒り」「憎悪」など——だけを感情とみなし、対象としてきたことだ。だが、メルロ=ポンティの議論に照らせば、「感情語」は「生きられた感情」を表すには既に「失効」している。つまりそれは「生きられた感情」を覆い、経験と経験主体とを隔てる帳とぼりなのである。この帳を引き裂いたとき、〈身体〉を引照した生々しい隠喩的感情表現——「腹がたつ」「頭が痛い」「吐き気がする」「むかつく」「胸がさわぐ」「息がつまる」「身を焦がす」「身ぶるい」「ハラハラ」「ドキドキ」など——があることに気がつく。ここに〈身体〉と「感情」を接続する契機がある。

4. 生きられた感情の社会学へ

(1) 「なぞらえ」による経験と理解

隠喩性と〈身体〉に注目するとき、レイコフとジョンソン（Lakoff & Johnson 1980=1986）の議論が思い出される。彼らは「我々が普段、ものを考えたり行動したりする際にに基づいている概念体系」は

「根本的にメタファー」で成り立つという(同上, 3頁)。つまり「隠喩」が経験や思考の方法となるのである。彼らによれば「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験すること」であり、人の経験や理解が「論理秩序(ロゴス)」よりも「隠喩(なぞらえ)」に依存するという(同上, 6-7頁)。また「概念」は「固有の属性」に定義されるのではなく、「経験の領域全体に」基づいて〈私〉が理解しているものだと述べる(同上, 175頁)。ある概念についての〈私〉の理解は、その大部分が他の概念への隠喩(なぞらえ)であり、隠喩(なぞらえ)とは、理解済みの経験領域の型(経験のゲシュタルト)を未知の経験領域にあてはめることである。さらに「議論」を「戦争」のメタファーで語る文化では、実際に「戦争」をするように議論をし、勝敗や戦略を重視するが、「ダンス」になぞらえる文化では「ダンス」をするように美しさや創造性を重視して議論するという。つまり「なぞらえるもの」が「なぞらえられるもの」を構造化するのである(同上, 5-6頁)。だが、概念体系の大部分が隠喩(なぞらえ)により成り立つのならば、その隠喩の連鎖を遡及した場合、大元には何らの「なぞらえ」も必要とせずに理解された始原的な経験がなくてはならない。レイコフらは「隠喩の母胎概念」として、〈身体〉で直接理解される〈上-下〉, 〈前-後〉, 〈内-外〉, 〈遠-近〉などの空間感覚をあげ、それらが様々な概念を構造化していることを例証する。例えば「楽しさ-悲しさ」、「意識-無意識」、「支配-服従」、「良い-悪い」などが〈上-下〉感覚によって構造化されている。一部引いておこう(図8参照)。要するに、〈私〉は不明確なものを明確なものに、直接経験できないものを経験済みのものに、つまり「身体的なものを基盤にして非身体的なものを概念化」するのである(同上, 98頁)⁷⁾。概念体系は「論理文法」でも、完全に「恣意的差異関係」でもないということになる。

図 8

「楽しさ(上) - 悲しさ(下)」 You're in <u>high</u> spirits. 「上機嫌だね」 I'm <u>depressed</u> . 「落ち込んでいる」	「良い(上) - 悪い(下)」 Things are looking <u>up</u> . 「景気は上向きつつある」 He does <u>high-quality</u> work. 「彼は質の高い仕事をする」
「意識(上) - 無意識(下)」 Get <u>up</u> . 「起きろ」 He <u>felt</u> asleep. 「彼は眠りに落ちた」	「支配(上) - 服従(下)」 He is <u>under</u> my control. 「彼は私の支配下にある」 He <u>felt</u> from power. 「彼は権力から転落した」

(Lakoff & Johnson 1980=1986, 19-24 頁より)

(2) 身体感覚とメタファー

〈私〉は〈上-下〉感覚についてだけでも実に多様な身体経験をもつ。それは単に空間的であることから始まり、様々な意味と連関していく。乳児のとき、「母親」をみるためには見上げねばならないし、お乳は上のほうから差し出される。成長すれば背が上に伸び、力も強くなる。重い荷を担ぐ時、下側の者は上の物の重みに耐えねばならない。その他無数の身体経験から〈私〉は「上らしさ」や「下らしさ」を〈身〉につける。このように身体経験に基づく隠喩的連関を〈身〉につけることで感情経験が成り立つのではないか。

例えば「重い」荷を担ぐ時、〈私〉は全身の筋肉の「緊張」と若干の「苦痛」を体感する。そして、その身体経験から「なぞらえ」られるメタファーを、〈私〉は可延性により〈身〉につける。すると、実際に重い荷を担がなくても、「重い」と「なぞらえ」られる「責任」を負うとき、あるいは友人から「重い」相談をうけたとき、共感性により「緊張」と「苦痛」を感じるようになるのである。物理的に何かの「下」になることで〈私〉に具現化された感覚は、「下」というメタファーで理解される社

会的状況——例えば「被支配」に〈私〉が置かれることでも具現化される。つまり〈身〉をもって知っている物理的な（身体感覚）から「なぞらえられた」社会的状況に〈私〉が置かれるとき、〈身体〉に当の感覚が生じる。これが「生きられた感情経験」ではないか。そのように仮定したいのである。

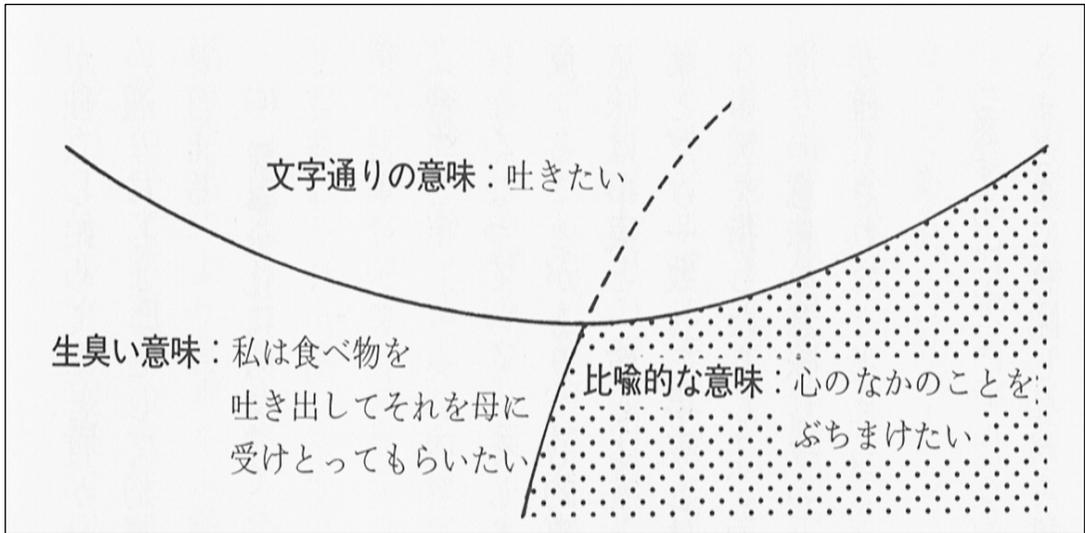
(3) 社会的身体と〈受肉〉された社会

メルロ＝ポンティは「老練なオルガン奏者」は、オルガン演奏を〈身〉につけることで、「自分の知らないオルガン、鍵盤の数も違えば音管の設え方も自分の使い慣れた楽器のものとは異なっているオルガンを、いくらか使いこなすことができる」と述べる（Merleau-Ponty 1945=1967[1], 243 頁）。これと同様に、〈私〉は「メタファーの概念体系」を〈身〉につけることで、「物理的状況」での身体感覚を、異なった次元である「社会的状況」においても、体感できる。それは可延性により「杖」に使い慣れることで「触覚」の範囲を延び広げることと同様に、「身体感覚」を「社会的世界」にまで延び広げることによる。それは〈私〉が〈社会的身体〉を獲得することであると同時に、生々しい身体経験をメタファーとして社会に投影し（なぞらえ）ながら、社会を〈肉〉づけ、〈意味〉づけていくことでもある⁸⁾。「受肉された社会」と「社会的身体」の肉迫した可逆的運動によって社会的世界においても身体感覚が誘発される。つまり、社会的身体に具現化した感覚が「生きられた感情経験」である。生きられた感情経験（社会的身体感覚）が——認知的評価（ラベル付け）や局所的な現実構築を必要とせず——すでに社会的文脈のなかにあることは、社会が〈受肉〉され生々しい意味を帯び、共感性によって〈私〉に表現してくるからである。メタファーを〈身〉につけるとは感情の「理解」だけでなく、同時に「経験」をも可能にする⁹⁾。

(4) 身体経験の隠喩化

肛門期理論によれば、腹のなかにある「汚いもの」や「未消化物」の排除には身体的快感が伴う。その「たまらない（溜まらない）！」や「すっきりした！」という表現が、身体感覚を表わすものでありながら、隠喩的な感情表現でもあることがわかる。また逆に「すまない」や「すみません」という表現は大小便がすんでいないときの身体感覚である。北山（北山 1988）はこのような心身両義的な表現の生々しい由来を母子関係から検討する。彼は「人に尻ぬぐいをさせる」という表現は「当初、母親や母親的環境に文字通りに尻ぬぐいをさせることで」満足や快感を得ていた出来事が、「やがて文字通りの身体的な意味を担う記号と比喩的に指し示される心理的意味」に距離ができ、いろいろな意味を臭わせる隠喩的表現として活用されるようになると述べる（同上、40 頁）。本稿の文脈に照らせば、他人に自分の失敗の後始末をさせるという社会的状況が「人に尻ぬぐいをさせる」という身体感覚になぞらえられているならば、当の社会的状況に〈私〉が置かれると、母親に「尻ぬぐい」をしてもらったときの言語化できない感覚（例えば筋肉の弛緩）に繋がるということになる。北山は「かつて文字通り」に体験されていたが「今は禁止されている生臭い意味（母親に尻拭いをさせる）、そしてこれを比喩にして指示された」意味という具合に、言事未分化の幼児期から、「言」と「事」に距離ができるにつれて分かれるという（同上、46 頁）（図 9 参照）。再び、本稿の論脈に照らせば、それは生臭い原体験からの「なぞらえ」によって社会を〈肉〉づけ、〈意味〉づけ、物理的な身体感覚が社会的な身体感覚へと延び広がる過程ということになる。「発達段階上で生々しい原体験があり」、〈私〉は「この原体験を意識しないで」「曖昧に隠して」、「成人してからもそれに近接した水準でやりとりする」のである（同上、42 頁）。

図 9



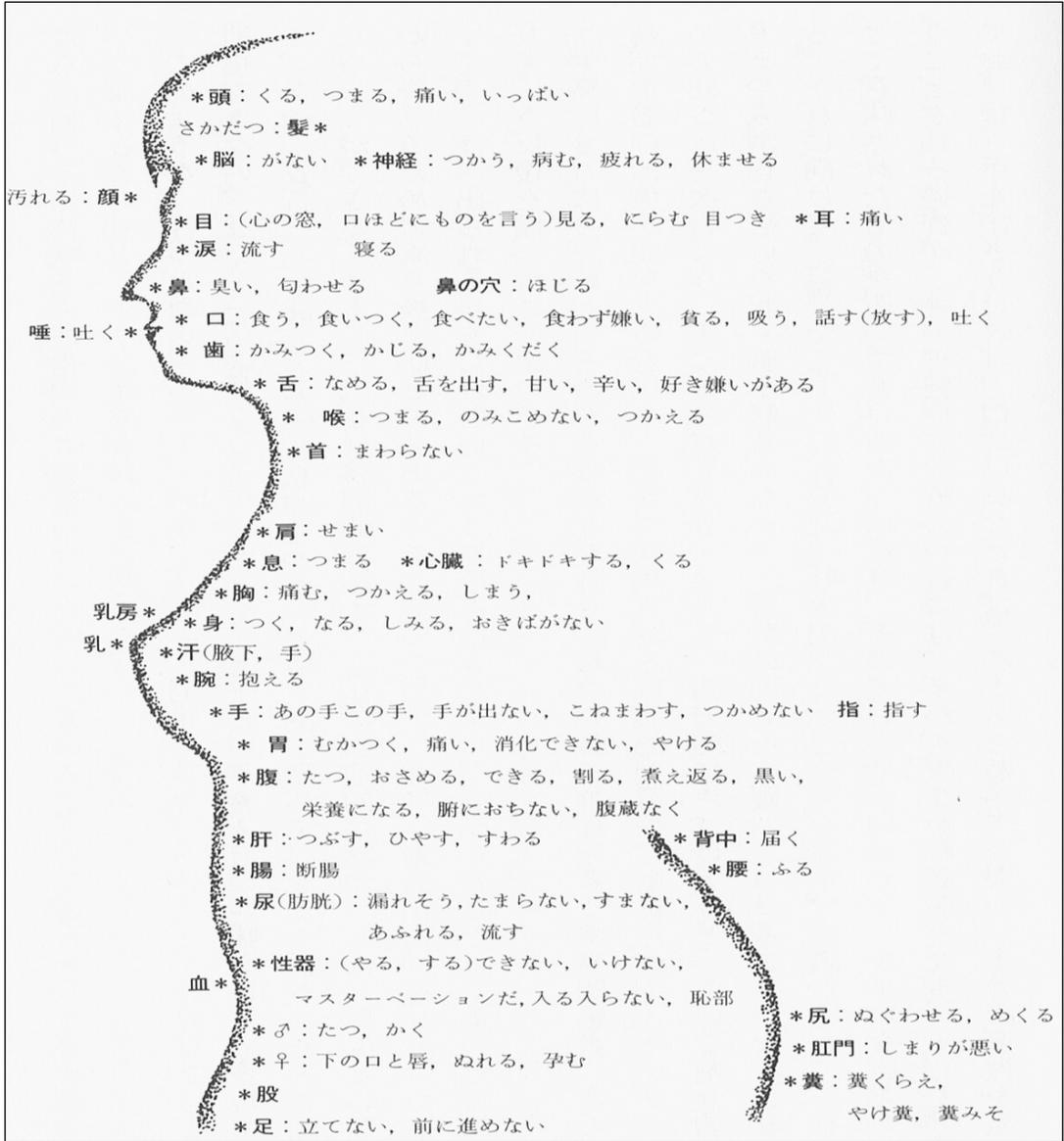
(北山 1988, 48 頁より)

生きられた「感覚」経験が、メタファーとなって〈私〉に感情を起こさせる。社会的身体において、例えば「未消化物」の放出感覚は、「消化」できない悩みや仕事を克服したときに体感される。「生きられた感情経験」とは、このように説明されるべきなのである。

これらのことは「感情語」を対象にしている限りはみえてこない。「ひっかかる」、「こびりつく」という表現にさえ、〈私〉は原体験の言語化不可能な感覚、そして感情的な意味を感じているのである。「消化できない」、「のみこめない」、「喉につかえる」、「胸につかえる」、「腑におちない」、「こみあげる」、「ちびりそう」、「くいしばる」、「ぶちまけたい」などの生々しい感覚を、社会的身体においては感情として〈私〉は経験するのである（図 10 参照）。

ところで、こういった「未消化物」や「心身内容物」の処理というのは育児環境や母子関係により異なってくるはずである。つまりジェンダーを含めた〈身〉の文化様式や文明化による衛生管理などに依存するだろう。例えばエリクソン (Erikson 1950=1977) によればカリフォルニア北部のインディアン、ユーロク族は肛門教育よりも、口や食べることの教育が厳しく、「出してはいけない」ではなく「食べてはいけない」という禁止が多いという。さらに「生きられた感情経験」の場合、〈私〉が具体的にどのような身体感覚の経歴（キャリア）をもつのかも重要になる。〈私〉がどのような身体感覚から生々しいメタファーを〈身〉につけてきたのか、どのような社会的身体を構築し、社会を〈肉〉づけてきたのかということは、個人的な〈身体感覚 - 感情〉のキャリアによって異なり、結果として感情経験の個人差を産む。ここに「生きられた感情の社会学」の成立可能性は開かれているといえるだろう。

図 10



(北山 1988, 65 頁より)

おわりに

感情社会学は「科学」である限りにおいて、感情経験の全体性や唯一性を説明できなかった。それは〈身体〉を科学的な「物的身体」としてのみ捉え、また「感情語」が指し示す明快で一般的な感情のみを対象としてきたためである。本来、〈身体〉とは様々な特性をもつ〈私〉の経験の現場である。そして感情には「感情語」だけではなく、〈身体〉感覚を参照した表現が多い。それは〈私〉が経験を理解する在り方が、身体感覚からの「隠喩(なぞらえ)」によるところが大きいからである。〈私〉は身体感覚からのメタファーを〈身〉につけることで、実際に物理的状況にいなくとも、その身体感覚

によってなぞらえられた社会的状況に置かれることで、当の身体感覚を体感する。例えば物理的にも社会的にも、消化できない、処理できないものを押し付けられて抱え込むと「吐き出したくなる」のである。

このように「生きられた感情経験」を説明することで、「科学としての感情社会学」の困難を克服できたであろうか。本稿では、まず「物的身体」を「生きられた身体」として捉え直すことで、身体的変化と感情経験の連関をめぐる段階的・因果的・規則的な「認知主義」を克服しようとした。それは同時に〈私〉に寄り添うことでもあるから、客観的な科学的説明による暴力性を無化する方向でもあろう。また〈身体〉という次元において「感覚」と「感情」を包括的に扱いつつも、そこに「社会的身体」という〈身体〉の新たな側面を見出すことで、両者の違いも明らかとなった。さらに、社会的身体は、身体感覚からの隠喩を〈身〉につけることで獲得される。そのため感情経験の文化的・時代的差異は、〈身〉の文化・時代的様式の差や言説的变化によることになる。

以上のように考えれば「科学としての感情社会学」が抱えていた困難を克服しうる社会学的視座が得られるのではないかと。もちろん、本稿は「生きられた感情社会学」の方向性を示したに過ぎない。さらなる理論的・実証的な考察が、今後の課題として残されていることは言うまでもないだろう。〈私〉の成育史や身体経験を社会状況とつなぎ、具体的に生きていく〈私〉がどのような社会的身体をもち、社会に生々しい感覚を投影しているのか。そうした「生きられた感情経験」の在り様を、少しでも解明していくことをめざしたい。

<注釈>

- 1) 「社会的関係」とは自-他間の「権力」と「地位」の過不足、およびその「責任の帰属先」で決まるという。「権力」とは一方が他方に強制的に何らかの行為をさせる関係性のことであり、「地位」とは一方が他方に自発的に行為をさせる関係性である。その過不足を引き起こした「責任」の帰属先によってマトリクス的に区分される。図式化すれば以下ようになる。

		権 力	地 位
		責任の帰属先	
過 剩		罪悪感	恥
	自 己	後悔・贖罪	償い
	他 者	非難・誇大妄想	完璧主義
不 足		不安	鬱
	自 己	不幸・恐怖	絶望・虚無
	他 者	反抗	怒り・敵意

- 2) 例えばアリエスの『〈子供〉の誕生』(Aries 1960)では子どもへの「愛情」の時代的変化が論じられた。またレーヴィ(Levy 1982)によれば、タヒチ島の住民は大切な人の死に際して悲しみや苦痛を経験せず、自己の内的な状態を「病い」や「悪霊の仕業」として経験するという。
- 3) この図は(山田 1997, 77 頁)を参考に、一部改めたものである。
- 4) 感情労働を「疎外」とすると、特に看護職など「弱者」のために感情管理をしている当事者は、「職業的アイデンティティ」との関係で苦しい立場に置かれる。実際、看護職であり、研究者でもある武井(武井 2002)は『感情労働』という社会学の言葉は、我々をどこに導いて行こうとしているのだろうか」と疑問を呈する。
- 5) この点についてリヨン(Lyon 1998:45)は、クルターの理論を「個人に具現化する感情(embodiment of emotion)を扱おうとせず」「感情文化の表象」を扱うだけであると批判する。
- 6) 岡原は「科学的調査の統計的妥当性といったもので」「生きられた感情は排除される」とし、その暴力性を「学術的営為は何とも思っていない。むしろ誇りとするぐらいだ」。「学問制度の内部で、研究者はそのように育成さ

- れており、そもそも人間科学を志す初心者への第一の踏み絵は、自分の個人的で主観的な世界の表明を禁欲」することであると述べ、感情社会学（者）の科学性と暴力性を批判する（岡原 1998, 21）。
- 7) これは市川（市川 1992）がいう「身分け」にあたる。丸山（丸山 1984）はこれに対し「言分け」が「身分け」を様々に変えるとした。レイコフらも身体隠喩だけが経験を構造化するわけではないことを認めるが、丸山とは異なり、表象をも身分けが基底する点を強調したといえる。
- 8) 後期のメルロ=ポンティ（Merleau-Ponty 1964=1989）は「感じるもの」が「感じられるもの」であるという可逆性のうちに、現象が生起することの根拠を探りあてようとした。そこで『知覚の現象学』において〈私〉と〈世界〉の媒質であるとされた〈身体〉が、主体の器官であるという意味を解除され、〈世界〉も〈私〉も同じ〈肉〉であるところに意味の生成過程をみた。
- 9) さらに、社会的身体に起こる感覚が、物理的状況での感覚とは異なっていることを〈私〉は直接理解できるだろう。それは杖が〈私〉の物的身体ではないことを直接知っているのと同様に、社会的身体が物的身体とは異なることを直接知っているからである。社会的身体は、受肉した社会との可逆的運動において、様々な社会的場面に合わせて振舞い、可塑的である。また直接手で地面を触るのと、使い慣れた杖で地面を触るのとでは生々しさが異なるのと同様に、社会的身体感覚（=感情）は物理的状況での身体感覚ほど直接的ではなく、「身構え」に近いのではないだろうか。

<参考文献>

- Aries, Ph. 1960. *L'enfant et la Vie Familiale sous L'Ancien Regime*. Plon. =1980 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房。
- Coulter, J. 1979. *The Social Construction of mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, Macmillan. =1998 西阪仰訳『心の社会的構成——ヴァイトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの視点』新曜社。
———1989. Cognitive 'Penetrability' and the Emotions, in Franks, D.D.・McCarthy, E.D. (eds.) *The Sociology of emotion: original essays and research papers*, JAI Press. pp.33-50.
- Denzin, N. 1984. *On Understanding Emotion*, Jossy Bass Publishers.
- Ellis, C. 1991. Emotional Sociology, *Studies in Symbolic Interaction*, 12, pp.123-145.
- Ellis, C. & Flaherty, M.G. (eds) 1992. An Agenda for the Interpretation of Lived Experience, *Investigating Subjectivity: Research on Lived Experience*. Sage, Newbury Park, pp.1-13.
- Erikson, E.H. 1950. *Childhood and Society*. Norton & Co.: = 1977 仁科弥生訳『幼児期と社会 1』『幼児期と社会 2』みすず書房。
- Funkenstein, D.H. 1955. The Physiology of Fear and Anger, *Scientific American*, 192[5], pp.33-50.
- Goffman, E. 1974. *Frame Analysis*, Harper & Row.
- Hochschild, A.R. 1983. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press. =2000 石川准・室伏亜紀訳『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社。
- 市川 浩. 1992. 『精神としての身体』講談社学術文庫。
- James, W. 1892. *Psychology: Briefer Course*, Henry Holt. =1993 今田寛訳『心理学（上）』『心理学（下）』岩波文庫。
- Kemper, Th.D. 1978a. *A Social Interaction Theory of Emotions*. Wiley & Sons.
———1978b. Toward a Sociology of Emotion, *The American sociologist*, 13, pp.30-41.
———1981. Social Constructionist and Positivist Approach to the Sociology of Emotion, *American Journal of Sociology*, 87[2], pp.336-362.
———(ed.) 1990. Themes & variations in the sociology of emotions. *Research Agendas in the Sociology of Emotions*, State University of New York Press.
- Lyon, L.M. 1998. The Limitations of Cultural Constructionism in the Study of Emotion, Bendelow, G. & Williams, S.J. (eds), *Emotion in Social Life: Critical Themes and Contemporary Issues*, Routledge. pp.39-59.
- 北山 治. 1988. 『心の消化と排出——文字通りの体験が比喩になる過程』創元社。
- Lakoff, G. & Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live by*. University Of Chicago Press. =1986 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳『レトリックと人生』大修館書店。
- Levy, R. 1982. On the Nature and Functions of the Emotions. *Social Science Information*, 21.
- Merleau-Ponty, M. 1945. *La Phenomenologie de la Perception*, Gallimard. =1967 竹内芳郎・小林貞孝訳『知覚の現象学 1』, 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳『知覚の現象学 2』みすず書房。
———1964. *Le visible et l'invisible*, Gallimard. =1989 滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの』

みすず書房。

丸山圭三郎。1984. 『文化のフェティシズム』 勁草書房。

岡原正幸。1987. 「感情経験の社会的理解」『社会学評論』第151号。

——1998. 『ホモ・アフェクトス——感情社会的に自己表現する』世界思想社。

Pylyshyn, Z. 1980. Computation and Cognition: Issues in the Foundation of Cognitive Science, *The behavioral and Brain Science*, 3[1]

Schachter, S. & Singer, J.E. 1962. Cognitive, social and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*, 69.

Scheff, T.J. 1983. Toward Integration in the Social Psychology of Emotion, *Annual Review of Sociology*, 9, pp.334-354.

Shott, S. 1979. Emotion and social life, *American Journal of Sociology*. 84[6], pp.1317-1334.

崎山治男。2005. 『「心の時代」と自己——感情社会学の視座』 勁草書房。

——2007. 「感情社会学という暴力——「生きられた感情」をめぐる」『立命館産業社会学論集』第43巻第3号。

高橋由典。1996. 『感情と行為——社会学的感情論の試み』新曜社。

武井麻子。2002. 「感情労働と看護」『保健医療社会学論集』第13巻第2号。

Woolgar, S. & Pawluch, D. 1985. Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problem Explanations, *Social Problems*, 32.

山田昌弘。1997. 「感情による社会的コントロール——感情という権力」, 岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准『感情の社会学——エモーション・コンシャスな時代』世界思想社。